



天狗松の話

昔、小丸に河野五兵という人が住んでいました。お嫁さんとの間には、5歳になるとも元氣な男の子がいました。

ある日のことです。その男の子が、急にだだをこねはじめ大声を張り上げて泣き出し、いつまでたっても泣き止みませんでした。お母さんは大変困って、あやしたりすかしたりしましたが、それでも泣き止みません。お母さんはもうたまらなくなつて、外へつき出し、戸をビシヤリと閉めてしまいました。

男の子は、なおもしきりに泣いていましたが、しばらくすると、泣き声がだんだん遠ざかつていくので、不思議に思い、戸を開けて外に出てみました。

ところが、どうしたのでしょうか。男の子は庭先の大きな松の木の上におり、シクシクと泣いているではありませんか。お母さんは大変びっくりして、松の木にかけより手をさしのべながら「早くおりておいで、そんな高い所にのぼっていると落ちて死んでしまうよ。」

といいますと、不思議なことに子どもがいるところあたりで、何か黒いものがムクムクと動き出したかと思うと、子どものつけ紐みたいなものがスルスルツとさがつて来ました。

お母さんは、驚きましたが怖さも忘れて、

「早くおいで、早くおりておいで。」

と、叫びながら、そのつけ紐をつかもうとしました。

するととたんに、真っ黒な物と男の子は、空高く飛び上がって、またたく間に見えなくなっていました。

しかし不思議なことに、男の子の泣き声はいつまでたっても聞こえてくるのです。お母さんの手にはちぎれた紐だけが残し、あまりのできごとに涙も出ず、ただぼんやりとつっ立っているのです。ようやく氣をとりなおした時は、涙がポロポロと流れるだけでどうすることもできませんでした。

丁度その時です。出かけていた五兵さんが帰って来ました。家の中にだれもいないので大声を出しながら呼んでいますと、裏の畑の方からお嫁さんの弱々しい声がして、泣きながら家の中へ入ってきました。

そして、五兵さんにすがりつくなり、激しく泣きながら、今までこのことを話しました。話をきいた五兵さんの驚きは大変なもので、顔は青ざめ、口をきくこともできませんでした。





月日のたつのは早いもので、その日から3年たったある日の朝のことでした。お母さんが、裏の畑で野菜をとっていますと、

「お母さん、お母さん」

と高い、高い、空の方から、自分を呼ぶ声が聞こえてくるのです。お母さんはびっくりして空の方を見上げますと、可愛がっていた自分の子どもが浮かんでいるのです。

お母さんは思わず

「ああ、お帰りなさい。一体どうしていたんだね。お前が消えてしまってから、お父さんともどんなにか心を痛めていたんだよ。はやくおいておいで。」

と呼びかけると

「お母さん、今日はお使いにいく途中なんです。そうゆっくりできませんよ。」

と、いいながら、つづけていいました。

「お母さん、もしあの松の木が枯れたら、すぐに新しい松の木を植えてください。お願いします。河野の家が続くかぎり、松の木が絶えないようにしてください。お願いします。」

「ではお母さん、名残り惜しいですが、もうお別れです。また会うことはもうできません。お母さん、いつまでも元気にしてください。お父さんにもよろしくいってください。お母さん、さようなら、さようなら……。」

と言葉を残しながら、東の方をさして飛んでいってしまいました。お母さんはもう気が狂いそう、東の空をいつまでも、いつまでも見つめていたということです。

その後河野家には、松の木が絶えないように植えられ、だれとということなくその松の木を天狗松と呼ぶようになりました。

また、小丸地区では子ども達が外で遊んでも夕方になると、家に呼び入れて決して外に出さぬようにしましたし、また、泣かせないように注意したということです。

尚、河野家は、今の高橋洋服店の道沿いにあった家で、昭和の初め頃まで私（黒木酒店）の家の前に、高さ20メートルにも及ぶ松の木が1本たっていました。それが天狗松だったので、時代も変わりいつの間にかなくなり、商店街となってしまいました。

（採話…小丸地区 黒木文子）
昭和61年8月発行 たかなべむかし第一集

大きな大きな大根の話

昔、横筏に御殿医がおられました。大変すぐれたお医者さまで、頭脳が鋭く、先々の事まで見抜くことの出来る方でした。

ある日、鴨野に住む御殿医の召使いが、自分の畑に

ひとかかもある見事な大根ができたので、主人の御殿医様にさし上げようといいました。まわりの者たちは、とてつ

もない大きな大根でしたので大変珍しく惜しいので差し上げるの

に反対しましたが、召使いはその反対をおし切り無理やりに筏に

持参しました。

御殿医はその心を大変よろこばれ、

「お前の志は、有難くいただいたから、持つて帰ってまわりの者達をなぐさめよ。」

と申されました。しかし召使いは無理にさし上げようと、御殿医にくり返し申し出ました。

御殿医はいよいよ困りましたが、しばらくめい想しておられると、台所から包丁を持ってこさせ、大根

を真二つに切られました。すると不思議なことに、大根の切り口から一匹の蛇が飛び出しました。

御殿医は静かに目を閉じておられました。が、そばで見ていた召使いはびっくり仰天、腰を抜かしてしまいました。

ややしばらくして、召使いは半ば気味悪くなり、切られた大根を急いで持ち帰りました。

（採話…後小路地区 小椋キミヨ）
昭和61年8月発行 たかなべむかし第一集

『たかなべ伝・伝リターンズ』では、当時、高鍋町の高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんが、高鍋町内の故老をたずね歩き、記録・作成した物語を紹介しています。

